

クラーク室内管弦楽団 第30回演奏会

“今宵もドイツ・ロマン派音楽とともに”

2013年8月28日(水) 19:15 開演

北海道大学クラーク会館講堂

入場無料

プログラム

R. A. シューマン (1810-1856)

交響曲第4番ニ短調 Op. 120

L. v. ベートーベン (1770-1827)

ピアノ協奏曲第1番ハ長調 Op. 15

ピアノ独奏：上杉春雄 (医学部卒)

指揮：奥 聡 (メディア・コミュニケーション研究院)

お問い合わせ：011-706-6595

(工学研究院・フロンティア化学教育研究センター 下川部雅英)

プログラムノート

今日、ちまたにはパソコン上で楽譜を作成できる便利なソフトウェアがたくさん出回っています。性能の高いものでは、フル・オーケストラのスコアを作成することができ、どのように響くか演奏もしてくれて、しかもボタン1つで、その各パート譜も瞬時に作成・プリントアウトすることができるのです。作曲者は、練習の直前まで修正を加えることができ、リハーサルの途中でもいくらでも手を加え続けることが可能です。このようなテクノロジーによって、(音楽の質は別として)最終的に出来上がった楽譜は作曲者の意図を十分に表したものとなるでしょう。

しかし、一昔前はもとより、18世紀19世紀の西洋音楽の世界では事情は大きく異なっていました。作曲者によるスコアは手書きの実物のみが存在し、さらに作曲者自身による修正や追加・削除がなされ、それをプロの写譜士(copyist)が演奏可能なパート譜へと書き写していきます。その課程で、写し間違い(ミス・コピー)があったり、写譜士や奏者の都合で作曲者の意図とは異なる形に変えられたりと、さまざまなことが行われます。著作権という意識がほとんどなかった時代で、演奏後に楽譜が散逸することもまれではなく、スコアにしてもパート譜にしても、その一部しか残っていないということもよくあることです。したがって、人気の出た作品は印刷譜として出版されますが、その原稿となる楽譜が作曲者のオリジナルの手書き譜であるとは限りません。そのような事情から、今日残っている有名な曲であってもさまざまな「版」が存在することも珍しくなく、作曲者の本当の意図を正しく反映している「決定版」を再構成しようという研究が、多くの作曲家の作品に対して今でも盛んに行われているわけです。

本日最初に演奏するシューマンの「**交響曲第4番 二短調 作品120**」も、シューマンの4つの交響曲の中で、最も数奇な運命を辿った作品といえるでしょう。この作品は実際には第1交響曲の直後、1841年に、2番目の交響曲として作曲され、同年暮れに初演までされています。ところが、この曲は再演も出版もされず、その後10年ほど放置され、その間に3つ目と4つ目の交響曲(今日、第2番、第3番とされているもの)も作曲されます。1851年になって、大幅な手直しがされ、1853年に修正版が出版・初演されています。1853年に出版された表紙の裏にはシューマン自身のことばで、この曲のスケッチは1841年にされたものである、ということが強調されています。何がシューマンをしてこのようなことをさせたのか、正確には分かりませんが、シューマン自身オーケストレーションも含めて、この曲の完成度に満足していなかったことが伺われます。あまり演奏される機会が多くない作品かもしれません。力強さ、軽やかさ、ロマンチックな旋律など、興味深い要素がちりばめられていますが、一方で、どこかまとまりに欠けるように感じられる部分もあるかもしれません。皆様の耳にはどのように響くでしょうか。シューマンの指示通り、4つの部分(楽章)を続けて演奏します。

北大卒の医師でありピアニストである上杉春雄さんとは、2度目の共演となります。ベートーベンの音楽は、本日演奏する**ピアノ協奏曲第1番**に限らず、演奏するたびに新しい顔を見せてくれる、懐の深い、楽しみの多い音楽です。本日はどのような響きがでてくるか、会場の皆様とともに、楽しみたいと思っております。

(メディア・コミュニケーション奥聡)